特別
ル2
3393
1

ル2
3393
1

<2000-194(1)>

Ilie Islay

Ful Gf Stefelrefe

Cserz Hoála

Túls

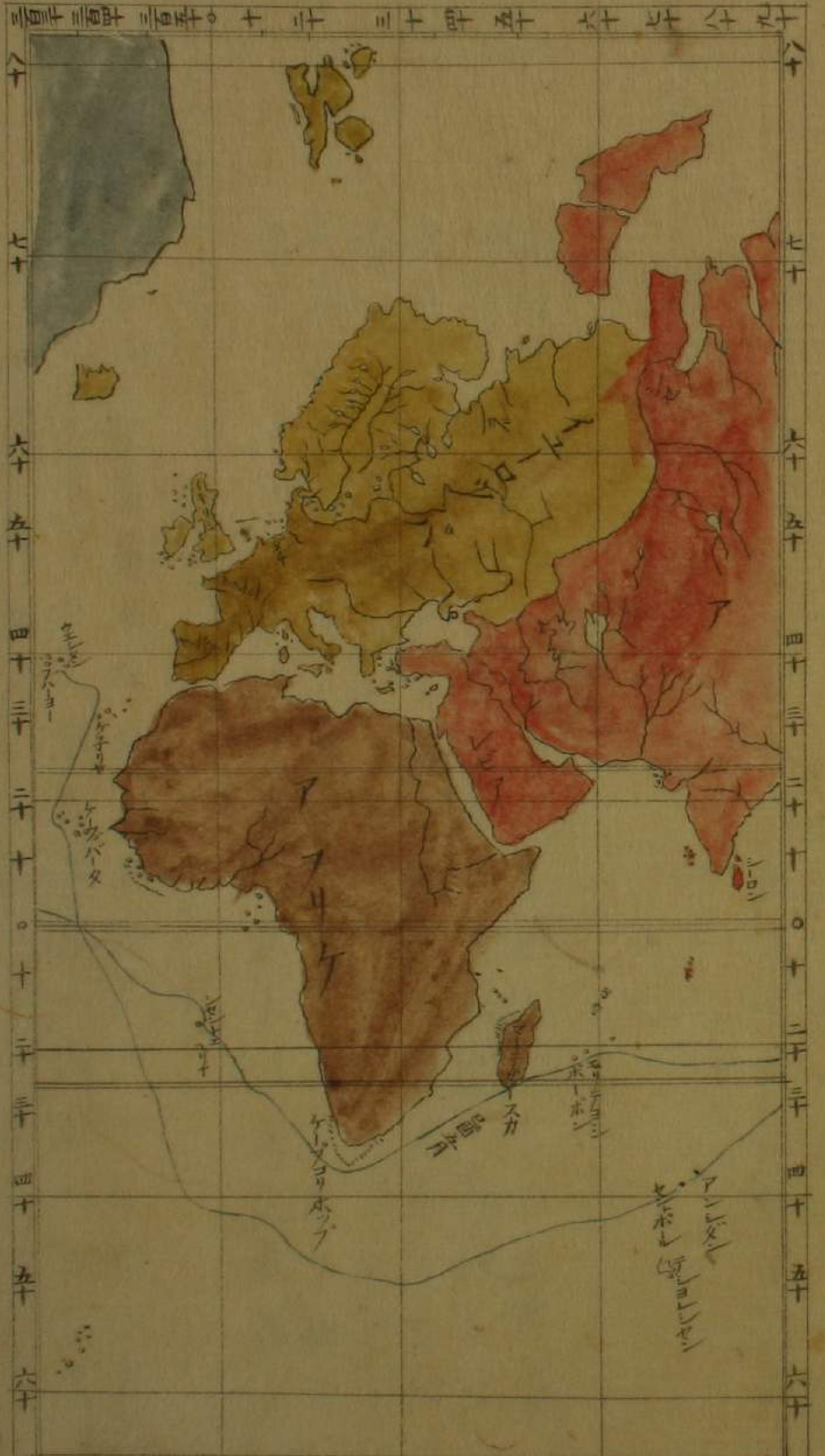
Grle Czelerzeze

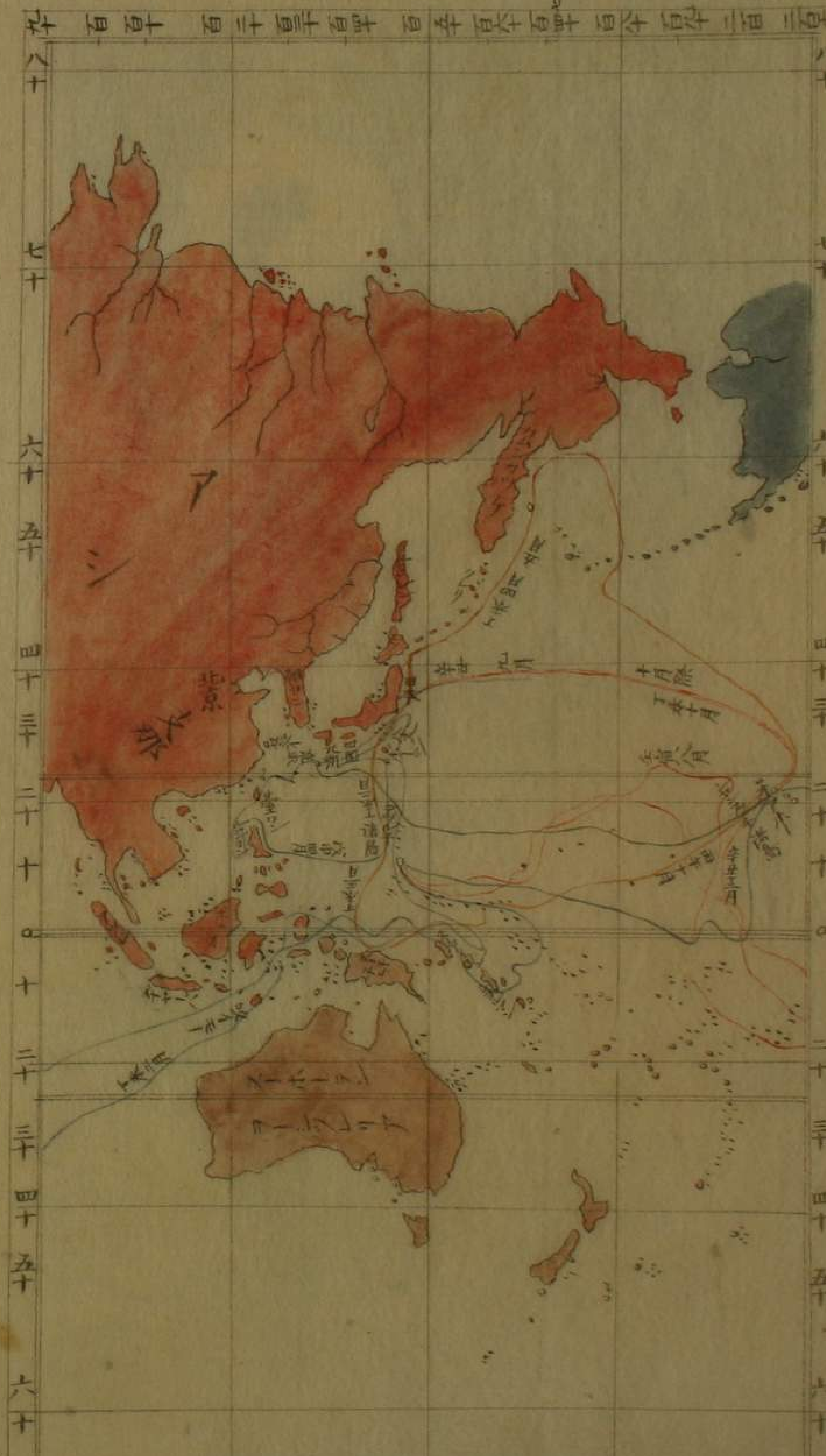
Jalály

高岡郡宇佐
傳藏 五十歳

傳藏弟
五右衛門 二十八歳

萬次郎


アフリカ



○膃脂二條

辛丑西月五人等一同漂流シ無人島ニ至リ洋外船ニ助命ラレ其船ニ上リ十月ノ際「オアホー」ニ至ルノ航路

○膃脂一條

萬次郎四人ト別レ辛丑十二月「オアホー」ヲ出帆シ「キンシメン」ヨリ三月ノ際「ギユーアム」ニ渇泊シ日本海ヲ過八月「オアホー」ニ近ヅリト虽ドモ風逆ニシテ入港スルヿヲ得ズ十一月「エミオ」島ニ泊シ壬寅四月ノ際「ショーウス」メリ辷ヲ踰六月「ノラスメリ辷スーベツホ」ヘ至之航路

○丹

丙午十月傳藏五右衛門「オアホー」ヲ出帆シ丁未西月「ギユーアム」ニ泊シ三月八丈島ニ臨ミ是ヨリ上陸シ歸朝セント計レドモ果シ得ズ

野作ニ至リ此ニテ上陸スト雖トモ船老ノ許
サルヨリ亦帰ルヿヲ得ス終ニ北海ニ至「ラ泥」
ニ臨ミ十月上旬又「オアホー」ニ至ルノ航路

○點花

萬二郎丙午十月「ヌーベツホー」ヲ出帆シ「ボー
シトン」ニ泊「岩シタン」ケープバーダ」等ニ泊シ
アフリケ」ヲ踰丁未二月「タイモー」ニ泊シ東シ
テ「スーアイラン」ニ泊シ近辺ヲ往来シ三月「望
ーアム」ニ泊シ四月「ボーニン」マンピゴミレ」等
ニ泊リ「ハレケン」ニ近ヨリ日本海ヲ東ニ走リ
十月「オアホー」ニ泊シ此ヲ出又「望ーアム」海ト
又ヒ戊申二月此ニ泊四月「正ヨン」ニ泊シ十月
「望ーアム」ニ泊「スーアイラン」近濵ニ依己酉二月
「シセ子マン」タイモー」等ニ泊リ五月「アフリケ」ヲ
踰六月「ヌーベツホー」
ニ到帆スルノ航路

○老黄

萬二郎己酉十月ヲ以テ「ヌーベツホー」ヲ出帆シ庚
戌四月「ワベレイショ」ニ泊シ五月「ギャレ牙子」ニ至リ
八月「ギャレ牙子」ヲ出帆シ九月「オアホー」ヲ出帆シ
辛亥正月琉球国ニ上陸シ終ニ
帰朝ノ旧念ヲ果シ得ルノ航路

嘉永五壬子嘉平月

小梁處士　稿

凡例

一 此書ハ漂民等長く外國に在て四方に航海せし事数々大地球を環経するに至れり實に我邦人のいまた嘗てなさゝるところなり其行状の概略各國の風俗ハ考ふるに足ものも少からす徒に之をさし捨も惜けれは筆にまかせ其百一を抄して偏に漂民の云ましに写したれは文の調ハさること殊に多し然とも其記載する処におゐて少許も自己の妄語を加ふるものなし

一 書中平假名にて録したる中に片假名にて記せるは蛮

語或ハ漢字ならぬ和語等なり猶上下の文ニ混
雜せざるが爲ニ「」如此点を用ゆ

一二字一音の假名ハ二字を合して一字の如くニ
す中ニもチヤキヤオアエの如く細字を肩上又脚下ニ
加へたるは一音合せ呼中ニ聲の大小促呼の前
後なりとあるなり其他相似たる音ハこれを以
て推べし

一總て蠻語ニは漢人の音譯したる文字あれとも
漂民の呼ることのニ合ざる者ハ尤多し故ニ皆片
假名を用ゆ中ニ就てシアンフチオスエメリケなど
散士徹私　北米利堅

の如く何々と云るハ何々と漢譯することのなりと
左傍へ假名附の如くニ漢字を附るなり看ることの
として讀易からしむる事を欲に　日本漢土等
の美ハ漢字を用て之を左傍へ假名を附和漢ニ
なるといつるは彼ニなれると云るなりと知らし
むるのみ

一書中圖する処の画ハ萬次郎をして稿を作らしし
め之を改正し以て寫し口讀の便と為

漂流紀畧小引

小梁子曰　我日本之爲邦坤輿中之一海島也自
神皇開基以降仁政德治百穀豊肥非洋外諸州之可
比倫也故舶客爲風漂墮外国者亦無不慕舊以歸
朝矣本州漂民傳蔵等以天保辛丑至無人島及撒
土微私此米利幹諸蛮日夜勞苦計歸朝之事十數
年于茲今茲嘉永壬子遂得其志豈非吾所謂慕旧
也者哉亦可以觀　我皇国之美耳

漂巽紀畧巻之一

川田維鶴撰

筆之丞等五人漂流之畧

天保十二年辛丑歳高岡郡宇佐浦西濱之人筆之
丞（時年三十八）弟重助（時年二十五）弟五右衛門（時年十六）筆之丞
隣人寅右衛門（時年二十六）幡多郡仲濱人万次郎（時年十五）
也者等近記湾ニ泛かべ漁りせんと約已ニ定り
宇佐浦人徳右衛門なるもの、收蔵せし長四間
有余の小船を借り糧米二斗五升薪水之ニ称ふ
とものを齎み正月五日己刻を以て宇佐浦を馬

頭を開帆し西に放類船許多と與津の西懸り泊
る六日佐賀浦を距ること十五里許にして縄場
洋と云処に臨み小魚十四五尾を釣り伊の岬白
濵と云ふに泊り釣るところの魚を煮て晩食す
七日早天西風に任せ窪津洋より蹉跎山の外五
里許りに向ふ類船ハ「ハジカリ」洋と云処に「こ」と
いへる漁場より其漁場海底一條数十里の溝の
如代ものより大抵鱗族の多くある处を以て最と
なす皆此の方よりむかひ出るといへども筆之巫
の船若干乗混り櫓手揃ハざる者ハ其階にすゝから

ざると計り彼を相はなるゝこと十数里にして
拼縄をかけて鯖魚数多を釣得巳刻頃に至りて
風坤酉にかはり雲の脚速疾なること甚しかりしが類
船ハ少しも是を見て急に帆を開き馳く磯にかへ
逃去れハ輩ミ巫も漁具を収め地方へ七八里操
寄する所に正牌に及ひ風絶へ雲去り海面も亦静
り更に漁具を出しおきおいて又拼縄を始める
少ほつて乾風烈しく吹起り四顧の気色懼るへ
記ほりきたなれハ疾くしく縄を曳揚皆死を徹
り力を戮せ陸を目がけ操立る亦日も既に暮尽

一汐烟立蔽ひ咫尺も弁へかたく又良風吹来ては渡
方相挑み船を覆へさむと欲る事殆と數計
に至れり此の政に當り主櫓の角を押し遁し在
合せの斧を以て船張を鑿ちて縄を切れに括縛
人を以ちうち又櫓の腕半より折れ容櫓ハ海へ
流れ失せ今ハ如何ともすへき事も絶え力ハ盡
えハ疲れ只茫然たる斗のみ筆之丞ハ桁を立隅
帆を開き浪を直舳に受る絶り任他せんと欲る
に風の勢ひ益暴寒氣更に加るに衆為に氷凍へ
筆之丞獨舵を把るに船ハ辰巳の方へ流され其疾

きこと箭の如し八日既に白らみ室戸嵜の地さ
人家も見ゆる迄漂ひ来る此辺ハ捕鯨場な
れハ山覧なとと云て小厰を山端に設け鯨鯢の来
るを遥望せる人あれハ助命船も出なんと有む
と恃しに然もあらず昨夜のさまにて櫓楫ハ損
失しぬへき工夫もなく免や角する隙にはや
室戸崎もすぎ紀伊の山を一髪と見て洋中遠く
流行ぬ此ハ只風浪の動に遮莫せ一同他事なく
神佛の擁護を禳のみ九日戌亥より風吹十日早
よりハ風ハ良に轉し雨を醸すれバ先蓬をふき棭

片と割粥など炊き魚と之を会食せり頃して雨
点雪に混し降にられを受掬飲渇とハ消ふある
既にして風まさ西となり酉戌より卯辰に流る
ゝ急潮にかり船ハ礼がきめる奔走す十一十二日
戌亥の風吹止まず十三日午牌の頃辰巳に住り
一螺の小嶼なるものを見得たり是ときに方り
糧米魚肉已に盡て皆飢渇に堪ずして曰く前頭
にあるものハ定めし島なれハかれに上り水を
得て啜飲み身を海水に投し死するにしかずと
皆起て桁を捲に代偶帆をならさし戌亥酉と直舳

に受りの島影を目て走るに風ハ西より潮ハ東
より来り船ハ礼り逆らひ殆と溺とす日暮て及
頃初めて島の北傍に至れども礁石林の如く並
び立固より近つくへからず縄にて敗艪を結傳
島園を漕廻り一礒稍平垣なるを認め於て礒
を距る事二丁余なる處に錨を下し歇泊すとき
風も稍収まり舳の間に會り暁るを待ち魚を釣
水を掬て前議の如くせん人と其侭更に屈指ある十
四日夜初て白み釣を投れハ魚頻りに多く暫時に
「アカバ」魚礒数尾を釣り衆皆曰く今そ命拋ヶ期至

れりと纜を切り放ち船を碇ろつなし上ゟ寅右衛
門五右衛門萬次郎ハ先へ躍て海に入華之丞重
助ら之れに継かんとせし所隙に船忽ち翻覆り華之
丞重助ら之れら益ゟ溺れし変又も崩きかゝる
瀾ろ立て返されて船復起き直り其隙にられを洇ぶれ
れ脱巌脚に上り後を顧バ船ハ已に微塵に砕破
板片猶波間に散乱せり此時ろ方り重助ハ脚を
折苦痛に堪ゑく目もくらみあるが寅右衛門等
ハ既に上陸し大に二人を呼號するよりこれに氣
を得て漸く上り得たりある夫より歩に信せ島

形を望み見きハ周負一里許の巌々たる大石山
よして茱萸萱茨の類暴生し其他の樹ハ亦皆細
ふして長五尺に余ばものなし乃ち饑を助らば
ものやあらんと探りしかバ虎杖の新萌含みに
堪ゆべきあるもとも都て壁岸上ゟなりて固より
られを採るこれかかりを得ぞ之を過ぎ西南ゟ向ふ
処大小の翼族夛き中ろ「トークロー」と称ふ鳥の
巣窟をもかば雛を養ふものなり其影しき千を
以て數ふべし又其傍に一口の嵓洞を認得たり
皆遠遍して裏面に入見れハ高九尺径一丈五尺

四方位の濶処なり皆白きに見へし如の鳥を食
ひ此洞をもつて雨露をしのぎ如何ぞ一日の性命を
繋りさらんやと浪の為に沙頭に打揚られたる
船板数片を敷列ねきを寝席の処と定め皆杖策
を携へ彼巣窟に入「トークロ」等の翼族を取鈎尖
をもつて皮を剥き拳石をもつて肉を舂き日光の
能照す處の嵓角に置乾盞とし又鮑を石焼と呼
分ち以て食に充てり如此して消光すること凡
や百余日なれどもひてりあるが中に就て雨降らなきこ
と凡七十日なりければ岩間の如きも一滴の

水も見ざるとなし今はいかんと工夫の施き得す
各々便水を手に受之を吸へども上より潤物
の些少きゆへ固より精を補ふに足られ一同唯
之れに苦痛せり一日筆之丞ハ万次郎を携へ岳
を掬に兼て食物とを探ほんと道なき険岩を
躋攀し其絶巓に登至すれハ邈々たる廣原なり即
ち見るに石を築き圓長にして二三尺ばかりなる処あ
り又舊井ありて底にハ濁水些少を溜め傍らに古
墳と覚ゆる者二箇を見得筆之丞以為らくハ著
漂流人の家居するありて爰にて必死なるを埋

なかりしと吾身の上を想やり佛号一遍を唱へ
覚へず袂を潤し於て又嶮阻を亘り穴居ゟ皈る
此なるを語りけれバ皆々吾輩も他日餓死す
可ハ後の話ニ傳へ其如く袂を潤もの有らん
と又も涙に沉みぬ四月下旬の候一日忽ち地
震なり夜ゟ至り強く洞中大ニ鳴動し砂石跳て
墜ちけり逃出んとすれバ洞門ニ崩来る石彩し
されハ今ハ亡滅の時至れりと皆相抱へ恐怖せ
りかくて震も止夜も明洞門を見れバ巨石蔽塞
しけるより且驚き且命数の強きを相祝し皆曰

三月之上下必有
闕字他日得善
本可校正

此の如く皇天の哀憐を受る事故他日必ず吉兆
も得る時も有るべしと祈誓懈りなかりしが六
月上旬の際前宵ニ初三月を見得し頃五右衛門
残更より目覚て再睡ニも就き難ければ曙天ゟ
起出渺々たる海面を望ニ辰巳の位ニ微物有り
山ならん雲ならんと低視久しくして稍動揺す
るを見定め是必ず船ならんと急ぎ四人を呼
起して曰三月頃の事なりしが余早起して洋外
船と覚しきもの東を北へ乗行を見たりしが今
在る処の物影も点さきに見る処のものならし

是極て帆船なり四名頭を打振信と為さらりしが
漸三里はかりもちかより来り果して巨なる洋
外船たると知り今そ天運の時来れりと欣ひ勇
ミ五右衛門の明を感しあるかゝ所に船は戌
亥の位をさして過行ぬ固より此島遠く隔れは
手招も届かれ寅右衛門も力を堕し泣ゝ洞中に
帰り只られと歎息せり衆等らの候濁水に苦む
のミにならす諸島は己に雛の羽翼成る者を携
て去尽し海食は乏しといへとも馬を刺し釣針
も今は失ひ更に一も漁具なくすへきもなし海菜

を採貝類を拾ひ僅に饑を助のみなりしが此時
萬二郎も磯辺小貝を拾ひ居たるが彼船より技
船二艘各帆二張を開れ此島を目当走来るを見
て聲を揚介船来りたりと言此を聞より寅右衛門
門五右衛門走り出帆桁の敗たるものに五右衛
門の夾服を結ひ急き是を押建れは彼船も直に
て招応し程なく間近く刺寄至る皆船毎に蓬
髪の人大名うして中にも　髪の黒人あり 此船始に
り助命に来れりはう次此島魚の乏と以て之と
得人りをれに来りしにはかりすらの号と見る
よう近く寄たる　此人等寅右衛門等三名を見て
なりとも

手拔りて助け乗せんと云皆々から神を震怒して
思へとも衣を脱彼技船へ泅ぎ渡れハ洋外人と
も三名の外に更に人ありたやと問ふゆへ窟居の
くゝを指し猶二名彼処に在し形容すれば甚
半隻の技船黒人を偕洞門の方ニさして走りたり重
助ハ初上陸の時創傷し脚未た愈ずして日々洞
中ニ臥揉捻の諸物を分ちもらひ衆に養はれ居
なるが此取筆之丞も大に饑疲も歩行も自由な
らされバ重助の看病し彼寅右衛門等ハ介船な
りとて磯辺に出しが如何なれるにか悩りつゝ此や

念ひ居たれハ鼎炭を塗たる如き異人二名洞門
に立て何やらん言へとも通知し得ず暫して彼
人筆之丞を捕へ抱き上んとす筆之丞肝を潰し
逃去とすれとも放さず一名手拔りて三名ハ已吾等
乗る技船に扶け上たれと形語するによりて重助
も與偕介抱せられ匍匐して磯辺に出技船より
担出され纜に操付泅至り漸技船に上得無刻に巨
船の方へと漕寄あるさて筆之丞等ハ思ひもよ
らぬ助命を得唯夢幻のことし案しつゝ彼大船に
近つけ則ちから神を仰きみれバ其長三十間衡六

間許なくして帆檣三本を立枝船八艘を備へ縦横
に旋せる縄綱恰も蜘蛛の網罟を設るごとし白
帆數十張悉く之に懸り其海風に翻翩たる体なり
すゐさも仰山なる大観なり夫より五名一同異
人ともに扶掖され巨船中に入あれバ裡面にハ浸
駝の龕の如く華嚴を究たる居室を並置し數十
名の人々皆嚴重に側席せり衆中船頭と思しき
人の前に引れ至り乃ち跪きぬれバ彼人五人に
對し何やらん問る故蓋吾輩ハ何国の人なるぞ
と問へる体なるべしとて日本人なりと答れと解

し得ぬさま袍ともに彼人にハ寒饑を憐み衣裳を恩し
たもんを五枚出し皆之を分服せよと形語して
授くまゝすなハち是ぞ炊奴甘藷（さつまいも）の蒸たるものを取
出し與たりしに船頭ハ五名等久しく島中に饑
居て急に多食ハ宜しからざるを計り呉れたる
を奪ひ取大にこれを叱り豚肉少許を授くれ且
菜汁一碗を嘗しむ追々食を与へくれ晩晨ハ「ア
レーテ」と云へる餅菓を食せられ午食ハ船中
皆他物を食ふ容子なれと五名ハ日本人なれバと
竊知せしや米飯の美味なるものを供せられ一

同拝受してこれを嘗むる抑此大船ハ「ノヲスメリケ」（北米利幹）ユナイツステイ（共政治）国「ヌーベッホー」の捕鯨船にして油樽六千牛豚数疋雜穀類及び大礮二口鉄銃三十挺を載せ人口三十四名を以てこれを行其名「ヂョンハチエイムシハヲラン」と称し船頭を「ウリユンエイテアイツスヒール」と呼び則「ヌーベッホー」の隣郷「フーヘーヅン」の人なり時に年四十左右全膚白色にして頭髪ハ純黒なり後領にてこれを剪み鬚鬢の如きハ悉くこれを剃り「バル」と云へる外套を著し「ヅラロヅ」（オウアホユ、ハ或「ハワエル」と呼）と云へる

袴を帯び其体容完好躯長六尺有余殊に貴人の形相を具せり筆之丞等以為らくは如此洋外の人に助られ後来如何なるやらむ計知難といへども身命を繋ぎ追ハ帰国の工夫もなからんやと相与に安堵の念をなしけるに已其日も過翌日となりて船頭万次郎を枝船に乗島の方へ遣んとされハ万二郎ハ再び島に返さるゝかと畏恐泣叫ぶさまハ船頭衣械の類なとは取来りと手枝すなは故稍解悟し頷きつゝ彼洞居に至り急ぎしくも當用の器械を取来きり無幾船ハ此島を離

き北ニ向ひ出日本東海より鯨を追東南の洋ニ
出六ケ月の際ニ鯨鯢十五六尾を捕獲たりさて
筆ミ亟尋捕鯨の術を熟視するに鯨魚の出るを
認ハ望子橋の絶末ニ昇遠遥の大洋を千里鏡を
以て見定め在処能分明なれハ下ニ向ひ之を知
らせハ便ち枝船四艘を卸し船毎ニ捕衆一名船
老一名船衆四名乗組船老ハ舵を把船衆ハ楫を
運ひ操行こと飛が如くして程なく魚ニ近ハ捕
衆能背上要脉ニ処を目当鏢利を之ニ擲てり然
るに魚の性一ならず或ハ直下の海底へ沈行り或ハ

無人島東面之圖

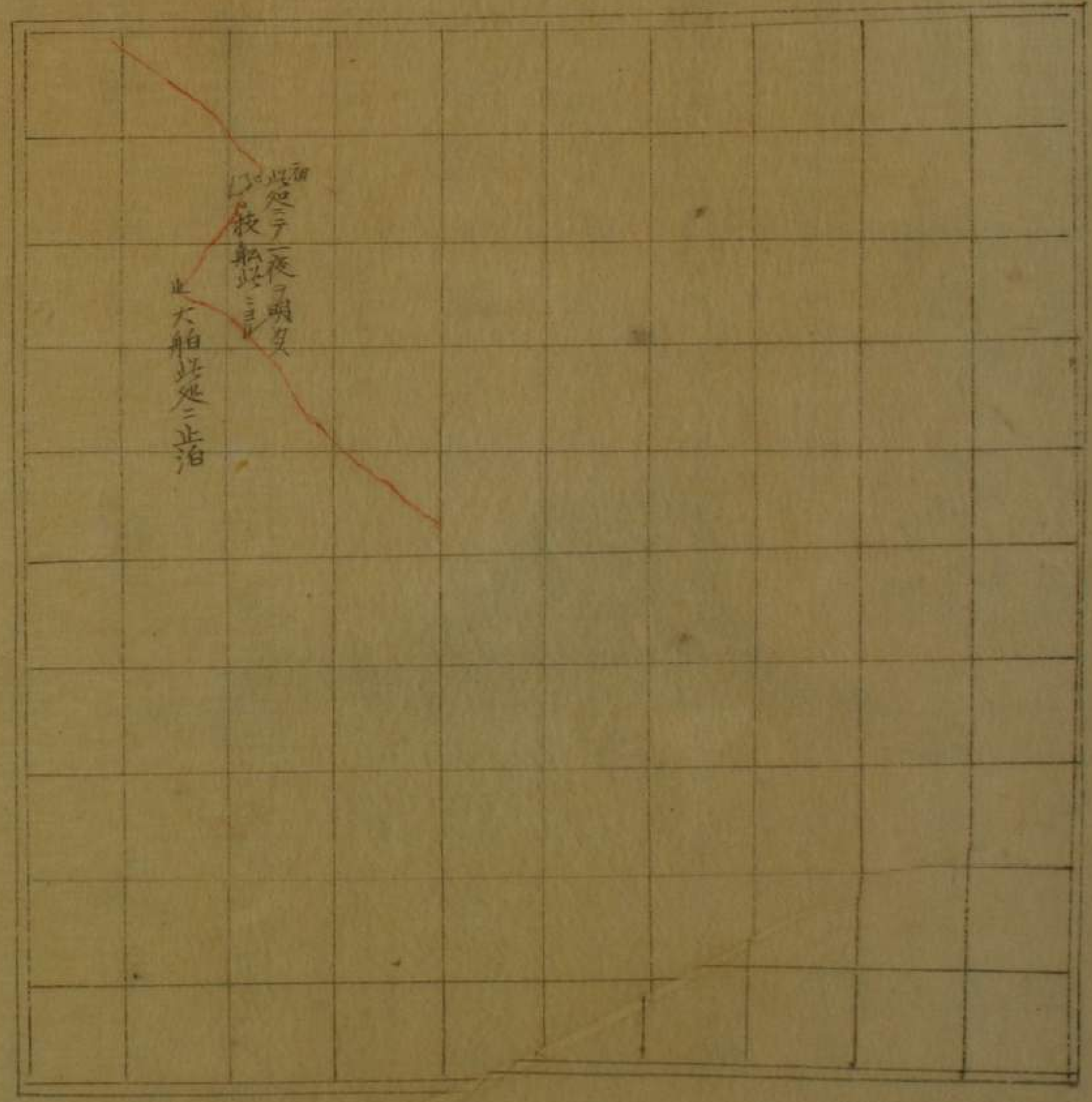
船中ヨリ鳥ノ大ニ群集スル䏻ヲ望ニ其甚シキニ至テハ殆ント山形ヲ失フコト有ト云

HAILCAIN ISLAND.

北極出地三十一度

無人島之全形

洋外人等此島ヲ目テハレケンアイラントト称ス



浪を擘て走るもなり皆其勢を慮見て早ミ手前
へ引退きて待時ハ魚又前に鏁利を突し處に引返
せり其時其鏁利の能要所へ的射するものハ即ち
死絶し若的ずして乱閙するものハ又鏁利を放
鈷搶にて吭頭を突ハ暫時に絶入し而してこれよりして
尾根を本船に繋き頭以より轆轤を懸船裡に巻
入一人船を跳下皮を穿綜を透徹船上より長屠
刀を以て皮肉の際をきり剥轆轤にて彼綱を巻
皮を船へ取入肉ハ海におとし之を顧ミ次船上
にハ大骨を復頭皮尾を細小に分截し油汁を煎

し出し其煎糟の収蔵せしと薪炭に代用中更に
他物と借るみとなし十一月と思しき頃「シアンブッ
チ島(アイランド)」の内「オゥアホー」島の港口に入船す時るふと
三十日許ありして船頭ウリャンエイチフィッブール
に引かれ上陸し「ダッタ(匠丈)チョーチ」を訪い挨さつ既
にす「フィッブール」ハ今茲云々此縁にて此人と等
と助る来れりと逐件演説す此容子なりきハ「看し
チ」ハ筆ニ盃等ニ向い合掌拝膜(ことなさやおがむ)なりし了ハ国也と
形問し又一朱鐐二十片二朱鐐十片寛永通寳一
完及い倭製の烟管一杵を出し此品の産ハ国な

ハべしと手抜しあるす中へ筆ニ盃等ある事形容
しりは首謡つゝ有れ銀銭等ハ八九年前大阪人
漂来り船頭ハ死亡し余人ハ「ハリョー」と云人の
煩りて「メリケ」船へ托ニ枝那より日本へ飯至た
り則其人ゟれ遺物なりり子等も今日船頭を托に
よし吾等供ニ介抱すくしと打返ゝし形語を
なせり此「メッタチョーチ」ハもと「メリケ」の人にして此
土に来り医を以て業とれし室ハ「ヲヒ子」女ハキ
ナウ」及ヒ奴婢凡五名を養へり夫より館(ハアー)知に至り
宰官名ハ「ツハナハ」と云つる人来り案験知了引

かれ失風の大畧を形語（問）せられ官処よりハ東弟東
簷にして宰官「ツハナハワ」の臣下「カウカハ巳」と
云人の家に含蔵せられ「カウカハワ」の弟を「チョチョ」と
云（後にアトワイの吏長とうせまり）性温柔にして、ましく人に遇し
て愛情を加へ百端此人の煩を受ることなし
華之丞等も居既に定まりあまハ「ウリェンエイチフィ
ツスヅール」「バル」（外套）「ヅラロ」（脚眼）等十枚を製らへ
「ハスタラ」（銀四）五枚を恵投くされ船價よりも外套
五枚を贈くられ無日矣「フィツフヒール」来り華之丞
等に対し各此の如く低身に成たる上ハ孰も心康く消

光すへし又萬二郎ハ予「メリケ」携ゆき養育せん
とす願くハ子等吾為に許せ吾必す不敬ならしれ
と遇すへからすと云華之丞深念せしか此洋外の
遠に漂泊し又散落にまかりしとも意に随ふと
も性命の主たる「フィツフヒール」より殊に此人天稟
篤行好て客に情愛を加ふ此請の如記も亦哀憐
の余りより万二郎の心慮次第子の自在たるへし
と答あまハ「フィツフヒール」大に欣ひ萬次郎を将て
本船にして帰りけり